

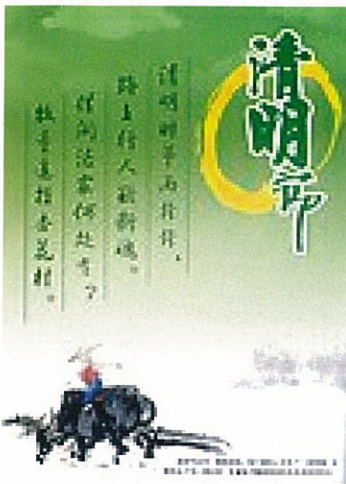
対岸の華事 中国WATCHING

Vol. 2 2010. 4. 13

在日中国人女性が外から祖国を見る

今月の TOPICS 清明節 (チンミンジェー)

キーワード：インターネット墓参り、青团、踏青



旧暦“春節”を迎えた後、中国では、もう一つ国民に重視される伝統行事の日があります。それは“清明節”です。いわば日本のお彼岸にあたり、故人を偲んで墓参りをします。また、春を迎えるこの季節は郊外へ遠足する行楽シーズンでもあります。

今回は、“清明節”における中国の庶民的な風俗習慣を紹介します。



『墓参り』 = “お彼岸”

中国では今年4月5日、先祖を偲ぶ墓参りを行う伝統的な祭日「清明節」を迎えました。墓参りには、お菓子や果物、色とりどりの香や蠟燭、紙銭（あの世で使う紙で作ったお金）で供養するのが一般的でしたが、近年、紙製の家具付きの1戸建てや車などを墓前に供える家庭も増えていきます。一方、簡単に花だけを持って墓参りする人も少なくありません。お墓の前では、清掃をしてからお参りをし、自分の先祖が天国でも良い生活ができるようにと最後に紙銭などを燃やしてお届けします。



『特色食品「青团」を食べる』



“清明節”に特有な食べ物があります。地域によってさまざまですが、上海辺りには「青团」(Qing Tuan)という小豆の餡子が入った玉のように丸い形の緑の餅を食べる習慣があります。ヨモギの葉をもち米の中に入れて作るため、独特の香りがします。

「青团」は清明節の一ヶ月ほど前から清明節が終わるまでの期間限定品という特殊性があるため、老若男女問わずの人気商品です。その人気度は中秋節の月餅に劣らないほどです。このシーズンになると、朝ごはんやおやつ代わりに「青团」を食べる人を至るところで見かけます。街中のコンビニでも簡単に手に入りますので、「青团」を一つも食べずに「清明節」を迎えることはまずありません。私も物心付いた頃から、もちろん食べていました。

『踏青』(Ta Qing)

「清明節」になると気候は次第に暖かくなり、春を迎える季節になります。人々が家を出て青くなった若草を自分の足で踏みながら春のうららかな日差しを浴び、大自然に触れます。これは「踏青」(ターチン)または「春游」(Chun You)、「探春」(Tan Chun)と呼ばれます。その昔は、凧揚げ、ブランコ遊び、綱引き、鬪鶏などを行っていたものが、現在都市部の人々は近郊へ花見観光に出かけ、春の景色を満喫することがメインになりました。

一年中、旅行は季節に関係なくいつでもできますが、「踏青」はやはり春だけの行事です。長い冬を過ごした後、蓄えて来たエネルギーを「踏青」に放出し、新鮮な空気を吸いながら大地からの精気をもらい、心身ともリラックスができることこそが「踏青」の魅力です。



『Economic View』



今年、4月5日を控えて、3月27日と28日の2日間だけで、1億人余りが墓参りをしました。清明節の3連休（4月3日、4日、5日）がピークとなるので、できるだけこの時期を避けるように政府が呼びかけもしました。

例年はこの時期になると、深刻な交通渋滞が発生します。そのため、近年、「インターネット墓参り」は政府が提唱して流行りました。最初は郷帰りできない海外に住む人達に向けて提供するサービスでしたが、交通渋滞の緩和、環境汚染の改善、更に利便性などの利点があるため、地元利用者が年々増える傾向にあります。値段はピンからキリまであります。死者へのメッセージを託すことからお香を焚くことまで墓参り全てのメニューを代行してもらい、それをネットで映像配信してもらおうと2000～5000元（約3万～7万円）の相場にもなります。対照的にお参りだけを代行してもらえば38元（約550円）で済みます。これもまた一つのビジネスチャンスの誕生と言えるでしょう。

伝統文化・行事が確かな経済効果や商機を生み出しているわけです。しかし、いいことばかりではないようです。現在、中国では「清明節」がもたらした墓地価格の急上昇が一層深刻な社会問題を巻き起こしています。上海では土地不足で、市内の墓地はここ10年で10%以上も値上げされました。現在、一般の墓地相場は1区画（1.5～3.7平方メートル）当たり2万～20万元（約27万～270万円）であり、高級墓地（7平方メートル以上）は1平方メートル当たり5万元（約68万円）になります。これは、上海市中心部の高級マンションに匹敵する金額です。普通の家庭にはとても手が届かないものです。

生活の基本である「衣食住」のうち、中国で最も取り上げられているのが「住」の問題です。生きているうちにちゃんとした部屋に住み、この世を去ったらまともな墓に入れるようにと人々は願っています。それで、墓に対する需要が高まっています。これから中国における墓地ビジネスの競争が激しくなっていくことは間違いないと思われます。

